



平成7年当時の第一海軍航空廠飛行機部第二工場

戦後50年の風雪に耐えてきたが、取り壊し決定。私達は、昭和19年7月より昭和20年8月まで、この航空廠の中で主として零戦の修理を行って来た。私達の青春はここを初舞台として開始されたと言っても過言ではない。(『戦いのなかの青春』より)

## 戦時下の土浦中学生12

～第一海軍航空廠・生徒たちの戦い2～ (霞ヶ浦その24)

土浦中学では、1944(昭和19)年7月11日に第一海軍航空廠(一空廠)に入廠した4年生(中45回)に続いて、翌年1月30日から3年生(中46回・47回:昭和17年入学、昭和21年4年修了)で卒業が46回、昭和22年5年修了で卒業が47回)も入廠、3月7日には2年生(中48回)も入廠しました。更にその年の6月18日には2年生(中49回)345名も一空廠に入廠しました。今回から生徒たちの各職場での戦いを描いていきます。

文中の【 】内は筆者による注記です。

### 通勤

土中45回生の工員養成所寮での生活は、父兄や教師陣の骨折りで、2ヶ月ほどで終わり、通勤が可能な生徒は、自宅から一空廠へ通うようになりました【土中45回は9月18日(月)から、土浦高女生は10月1日(日)から】。近隣の生徒は、徒歩や自転車通勤しました。中には、藤沢村【現土浦市藤沢】の自宅から右折の一空廠まで、往復30km余の道程【みちのり】を自転車通った生徒もいました。朝早く家を出て、残業で帰りは遅くなりまして、暗闇の中を無灯火で走っていました。

遠方の者は、筑波線や常磐線を利用しました。その頃の通勤について、中48回・高1回の屋口正一は、『櫻水物語 戦中派の中學時代』の中で、『通勤列車』と題して、次のように記しています。

「この頃の客車はスシ詰めを緩和する為三人掛、デッキ寄りの椅子を外したり天井からつかまり棒が下っただけのロングシート車などの改造車が目立って来た。黄緑色のシートは引裂かれたままだったり、代りに南京袋が被されたりで荒れていった。客車と客車間の幌は破れて、連結器の下にはレールが走った危険なのも屢々【るる・しばしば】あった。乗客はデッキのステップに迄あふれた。」

荒川沖駅は一空廠朝の顔の一つである。

通勤列車が駅にさしかかると、人々は先づホーム側の車窓をおろす。現在の車輛は総べて上方へ持ち上げて開けるが、当時は車体外板と内張との間へ下げ降

ろす方式だった。網棚へ両手を掛け両足を車外に出し、窓枠に腰掛ける格好で降車用意をする。列車が止るや否や上体を外に出しホームに飛下りる。デッキからは勿論窓といふ窓から一斉に出た人々は、一ヶ所の跨線橋めがけて駆け寄る。昔乍らの狭い橋なのでホームはしばし人の群で埋った。

下りホームへ渡って駅舎(当時は西口のみ)を出た人の流れは、十段程のコンクリート階段を駆け降り、岡谷館【合資会社岡谷館製糸荒川沖工場】あとの倉庫の横を通過して常磐線踏切へと急いだ。通勤列車から吐き出された人の波は、早朝の朝霧の中帯の様に一空廠まで連ったのである。」

1945年に入ると、空襲が激化し、艦載機による銃爆撃も行われるようになり、通勤も命がけのものとなりました。その当時の状況を土浦高女4年生であった杉本光以【兵器部航空図板係】は、『戦いのなかの青春』に「生命」と題して、次のように綴っています。

「毎朝、航空廠へ出勤する前には、母や妹と水盃【みずさかずき】を交す、『ただいまかえりました』の声がするまで家族の心配は、私の想像を絶するものであったに相違ない。」

(略)

勤務日は、土曜日・日曜日のカットされた戦時体制で、月、月、火、水、木、金、金。休日は二ヶ月にたった一日だけでした。

朝六時半、自転車で乗って山また坂を幾つも越えて、七時やと職場にたどり

着く。

(略)

帰り道、あつ、敵の艦載機が近づいた。自転車を放り出して、道端の林の中に夢中で隠れる。パチパチと機銃掃射の雨、死んで当り前の人命の価値、危機が遠のいた頃、又、自転車を走らせた。

途中に食用配給券無しで、うどんを食べられる店があるというので立寄る。うどん汁は塩水、出し汁と具は鯨の皮だけで、ゴム靴を噛んでいるのと同じ。歯の跡もつかず、何の味も臭いもしなかった。帰宅してホッとする間もなく、警戒警報のサイレンが鳴ると、自作の防空頭巾を被って、家族で作った庭先の防空壕に入る。雨が降ると、水がガバガバと溜りくみだしても直ぐに溜ってしまう。

勉強などという言葉は何処かへ消え失せ、生命の有無の線上をさまよった。

(略)

### 現場配属

1944年7月11日(火)に入廠した土浦中学4年生(中45回)は、養成班・教育班での訓練・実習が終わり、29日(土)から現場配属となりました。その職場での勤務状況等を記した日記【「勤労働員学徒の日記抄」(『戦いのなかの青春』所収)】の一部を紹介します。

(1)中45回 風間 雍【飛行機部第二工場仕上班】

昭和一九年八月二一日(月)晴天

本日から【飛行機部第二工場】に配属された。自分は六人組んで仕上の渡辺組になった。仕事は降着装置関係のもの、早速少し組立をする。定時終了帰舎後二

階の者は部屋の天井を外させられた。焼夷弾が天井に止まるのを防ぐためであった。

八月二二日(火)晴天

零式艦上戦闘機の脚基部取付け、初めてでなかなか難しかった。本日より二時間残業となる。大分腹がへった。薄暗くなり帰る。夕食時リンゴジャムを二人に一瓶ずつ配給あり。甘かった。平時には一回も食べたこともないものを戦時に食べたことは笑止である。

八月二四日(木)晴れ後雨

出廠、作業完成の域に達せず、定時終了。帰舎後洗濯。岡野、村松、高野三君の入隊による餞別一円五〇銭。

八月二五日(金)晴天

出廠、夜間戦闘機「月光」改装完了、いよいよ征く。

八月二七日(日)晴天

日曜日なので養成所にて教練、作業の疲れでハリキッテできない。飛行場の隅に行き対空射撃訓練、麻生中生は外出で羨ましかった。午後は講堂にて教練学科、三時終了後昼寝などして休養。

八月二九日(火)晴天

朝の作業前に部長訓示。作業は少しは進捗せり。二時間残業、帰舎夕食後直ちに食堂にて中学生徒演芸会を催した。皆非常にうまく愉快に過ごす。中隊別では二中隊が一等であった。一一時終了、直ちに就寝。

九月二日(土)晴天

廠内に大分赤痢が流行の様子、十分注意が必要。二時退廠、講堂にて七月分の報酬一人当り一〇円支給、その後小林少尉から土空【土浦海軍航空隊】適性部の話あり。四時より外泊許可。夕食をせず

に直ちに帰宅、疲れたので風呂に入っすぐ寝る。

九月三日(日)晴天

六時三〇分起床、一時間寝坊する。何することもなく一日中休養、食事は色々御馳走があった。午後ともなれば直ぐ帰舎の用意だ。一つも落ち着かない。五時に家を出て汽車にて無事帰れり。

入寮後1ヶ月余、航空廠や寮での生活

にも慣れてきたようですが、いかに若いとは言え、残業も始まり、休日もない生活に疲れも溜まってきたようです。

(2)中45回 来栖三男【飛行機部第二工場板金班】

昭和二〇年一月一日(月)曇りのち晴

朝方、警戒警報発令。九時半までに登校、新年の拝賀式。工場動員で学校をわたのが七月だから、約半年たったわけである。佐久良東雄先生の歌碑が玄関前にたてられ、新講堂の骨組みができています。諸先生の顔を見られるのも何となくつかしい。工場での生活から見れば、学校で授業を受けていた頃が思いだされ、学校生活がいかに幸福だったかと考えさせられる。式後、海軍気象関係の就職募集のための講話を聞いた。

一月二日(火)晴

作業は【損傷した零式戦闘機】一九七号のフラップの鉸の打ち替え。完備検査にあつさり通るよう努力しよう。(註、零式戦闘機の翼関係の修復が私の主作業)

一月三日(水)晴

元始祭。一〇一二号のタンクと三八六号の翼端の修理作業。定時間で終わる。

パンと菓子の配給券を渡される。

一月四日(木)曇りのち晴

一〇一二号修理。友人が昼食の弁当を蒸気で暖めて高橋少尉に叱られる。りんごの配給券を渡される。帰宅と同時に警戒警報発令。(註、通勤は自転車利用、土浦幼稚園に近い自宅を午前六時二〇分には出発、午前七時には入廠した。早朝の通勤と冬の作業は身体には辛かった)

一月五日(金)晴

寒い、コンクリートの工場なので脚が冷える。一〇一二号の翼端修理。帰りに西風が強くて、耳がいたくなる。

一月六日(土)晴

一〇一二号の修理と九五号修理。午後二時作業終了後、養成所に集合。服装の点検と上級学校進学希望者への諸注意。

一月七日(日)晴(しぐれあり)

休む日なのに総員出勤。



「動員生徒の集いで、神風鉢巻を掲げる中45回大津一郎」(平成7年4月10日)

私達が「神風」の鉢巻を締め……と、50年前の汗に黄ばんだ鉢巻を掲げ絶句する大津一郎。参加者のすすり泣きの声が聞こえ、一同50年前にタイムスリップして感無量。(戦いのなかの青春より)

一月八日(月)晴

大詔奉戴日。【太平洋戦争開戦の詔勅が出された1941年12月8日を特別に記念

する日。42年1月2日の閣議で決定され、同年1月8日を第1回とし、以後毎月8日を大詔奉戴日とすることになる。国民の戦意高揚を図る目的で採られた措置の一つ。】

朝の式あり、部長訓示、神風鉢巻伝達式。工員の一部は「雷電」や「紫電」の改造に。第二工場編成がえ。

一月九日(火)晴

空襲警報発令。

工場のなかには神風鉢巻ではりきつているようみえる。

七九二号の主脚カバー完成。班長が直接われわれを受け持つて総力發揮の作業。

一月一〇日(水)晴

一〇一二号の主脚カバー修理中。

朝礼で、鉢巻をなげ着けないかと川上少尉に注意を受ける。

空襲が日増しに激しくなり、生徒たちの戦いも銃後の戦いではなく、最前線同様のものになっていきました。

※参考文献

『戦いのなかの青春』

(戦後五十年 卒業五十周年 第一海軍航空廠動員生徒の集い記念誌)

『櫻水物語 戦中派の中學時代』

(中48回・高一回 屋口正一)

(高21回 松井泰寿)

※アカンサスは、進修同窓会のHPに創刊号から掲載されています。アドレスは、

<http://www.sin-syu.jp/>です。

バックナンバーを希望の方は、進修記念館(二高構内)2階の同窓会室(執務日)火曜日9:30~15:30までお越し下さい。